

天永二年  
十一月廿三日

## 忠通邸作文会の漢詩について

菅原在良の研究

三 浦 加 奈 子

平安朝後期に活躍した儒者菅原在良(菅原定義男。一〇四一—一一二一)は、菅原道真から七代目にあたる人物である。ここで在良の経歴をいくつか挙げてみる(△▽内は典拠)。

寛治元年(四十七歳) 式部少輔、兼大内記△『為房卿記』▽。  
永長元年(五十六歳) 文章博士△『後二条師通記』▽。

天永二年(七十一歳) 式部大輔△『永昌記』、『中右記』▽。

永久三年(七十五歳) 鳥羽天皇侍読△『古今著聞集』▽。

保安二年(八十一歳) 卒す△『尊卑分脉』▽。

大内記、文章博士、式部大輔といった職を歴任し、また、鳥羽天皇の侍読となったことは、たいへん栄誉なことである。これらのことから、在良が有能な人物であったことが分かる。しかし、在良の儒者としての歩みは、平坦なものではない。前に挙げた在良晩年の華やかな活躍については、在良の有能さとは別に、藤原師通・忠実・忠通ら撰閲家との関わりも考えなければならぬだろう。それは官職のことだけでなく、文学活動においても見過ごすことはできない。そこで、本稿では、在良と撰閲家との文学活動における関わりを示す一つの例として、天永二年十一月二十三日、藤原忠通邸

で行われた作文会をとりあげる。忠通との関わりを通して、在良がどのような文学活動を行なったのか、また、この作文会の詩において、在良が何を表現しているのか検討したい。

一

さて、この作文会の詩は、『中右記部類紙背漢詩集』(注一)に収められており、『圖書寮叢刊』(平安鎌倉未刊詩集)によって見ることができる。「対雪唯斟酒」と題する詩十九篇の終わりに、

天永二年十一月廿五日 中納言殿御作文 題者在良朝臣 講宗  
光 読為隆朝臣

と記されている。作文会の主催者は中納言というわけである。また、この時の在良の詩に、

遥猷羽林万歳亲

との句があるので、主催者中納言は、近衛中将でもあるようだ。そこで『公卿補任』天永二年条を確認してみる。

權中納言正三位 藤原忠通十五 正月廿三日 右中將如元 二月一日從二位 行幸院  
裏。

つまり、権中納言であり、右中将でもある藤原忠通が主催者ということになる。また、『公卿補任』の記事を見ていくと、興味深い事が記されている。天永二年十一月五日に、大江匡房が亡くなっているのである。

前権中納言正二位 江匡房 七十一 七月廿九日任大藏卿 十一月五日薨 七十二。

本作文会の行なわれるわずか前のことである。また、『中右記部類紙背漢詩集』の記載では、作文会があったのは「十一月廿五日」となっている。しかし、『殿暦』では、十一月二十三日条に、以下のように忠通の作文会のこと記されている。

今夜中納言作文ノ事有り。題者、在良。講師、宗光。(今夜中納言有「作文事」。題者、在良。講師、宗光。)

十一月二十五日には作文会の記事はない。『中右記部類紙背漢詩集』では十一月二十三日、『殿暦』では十一月二十三日との違いがみられることになる。そこで本稿では、『殿暦』の記事を採り、作文会は十一月二十三日に行なわれたのではないかと考えている。では、作文会での在良の詩について検討しよう。『図書寮叢刊』による本文を記すと、以下の通りである。また、併せて平仄も右側に付す。平声を○、仄声を×としている。

○××○○××

寒雪対来思幾唯

○×××○○○

斟緑酒酔吟情

×××○○○×

月□送眼華櫛尽

○××○○××

風後寄望玉盞傾

×××○○××

管馬入郷尋道処

○○○○××○○

王船添戸造門程

×○○×○○××

老陪詩帯何為道

○××○○××

遙献羽林万歳榮

はじめに、本文について述べておきたい。問題と思われるのは、第一句目、二句目と、第三句目である。『図書寮叢刊』所載の写真によると、『中右記部類紙背漢詩集』の写本では、一篇の詩の各句を区切らず、続けて記してあるようである。それを、凡例によると『図書寮叢刊』では、句の末を一字空けるといいう形で、各句ごとに区切って翻刻がなされている。そこで、第一句目と二句目を区切る際に、『図書寮叢刊』の翻刻では右のように区切っているのだが、それでは平仄の決まりが守られなくなる。この詩は、仄起こりであるから、第二句目の二字目は平声でなければ、粘法が守られなくなる。また、第二句目の「情」字は押韻であるので、七字目にあたるはずである。詩題に、「唯斟酒」とあるので、第一句目を「唯」字までで区切るのでは意味がつかない。現行の区切り方では、平仄の上からも、意味の上からも、問題がある。そして、現存する在良の詩の平仄を調査したところ、在良は平仄を守って詩を作ってい

ることが分かった(注二)。そこで、第一句目、二句目は、

〇××〇〇×

寒雪対来思幾

〇〇×××〇〇

唯斟緑酒醉吟情

のように区切り、第一句目の七字目に欠字があったものと考えるのが妥当ではないだろうか。また、第一句目の七字目には「何」字があてはまるのではないか、とも考えられる。「幾何」ならば、意味もよく通る。ただ、この詩の韻字は「情(下平声庚韻)」なのだが、「何」は下平声歌韻であり、踏み落としになる。第一句末は韻を踏んでいるので、本稿では断定できない。

また、第三句目の欠字について考えてみる。第三句目、四句目を

対比させてみると、「月」に対して「風」、「前」に対するに「後」と考えられる。

×〇××〇〇×

月圃送眼華樽尽

〇××〇〇×〇

風後寄望玉盞傾

「前」字は、下平声先韻で平声なので、粘法も守られることになる。

では、在良の詩の内容を分析していく。本文は『図書叢刊』に従い、前に記した校訂を加えた。また、訓読・通釈を付した。

二

対レ雪唯斟レ酒

寒雪対来思幾<sup>四</sup>

唯斟レ緑酒一醉吟情

月圃送レ眼華樽尽

風後寄レ望玉盞傾

管馬人レ郷尋レ道処

王船添レ戸造レ門程

老陪レ詩帯一何為道

遥猷レ羽林一萬歳栄

文章博士菅原在良

寒雪に對し来れば思幾ばくぞ、

唯だ緑酒を斟みて醉吟の情あり。

月前に眼を送れば華樽は尽き、

風後に望を寄せれば玉盞は傾く。

管馬の郷に入らんとして道を尋ぬ

る処のごとく、

王船の戸に添はんとして門に造

る程のごとし。

老ひて詩帯に陪し何為れぞ道は

ん、

遙に羽林に猷ず万歳の栄。

(通釈)

冷たい雪に向き合うと思いはどれほどであろう、

ただ良い酒を斟んで醉歌の気持ちを抱かずにはいられない。

月に照らされた雪景色に目をやると(たちまち)酒樽は尽きて

しまい、

風が吹いた後の雪景色を眺めると(また)盃を傾けずにはい

れない。

(目の前の雪景色は、まるで)管仲の老馬が故郷に帰ろうと雪

道を間違えずに歩んだ時のようであり、

王子猷の船が友人(戴逵)の家を尋ねようとその門まで至つ

た時のようである。

私は年老いてこの作文会に参列し一体何を申し上げることがありましょう。

ただ羽林様に万歳の栄を献上いたします。

### 三

さて、この詩の中で、在良は何を言おうとしていたのだろうか。

まず疑問となるのは第一句目の内容である。

寒雪対来思幾何

寒雪に對し来れば思幾ばくぞ、

冷たい雪と向き合っていると、ある思いがわきおこってくる、その思いはどれほどであろう、というのだが、この時在良の心におこった思いとは何なのだろう。これは、この詩全体の理解に係わる重要な点である。そこで、詩の他の箇所解釈及び、詩に引かれている中国古典文学の典故を辿ることによって、解決の糸口を見出したい。

まず、第五句目の、

管馬入郷尋道処

管馬の郷に入らんとして道を尋ぬる処のことく、

である。これは、『韓非子』を典故とする所謂「管仲隨馬」の故事に拠っている。

〈『韓非子』説林、上、第二十二(注三)〉

管仲・隰朋、桓公ニ從テ孤竹ヲ伐チ、春往キテ冬反ル。迷惑シテ道ヲ失フ。管仲曰ク、老馬ノ智用フ可シト。乃チ老馬ヲ放チテ之ニ隨ヒ、遂ニ道ヲ得タリ。

(管仲・隰朋從ニ於桓公ニ而伐ニ孤竹ニ、春往冬反。迷惑失レ道。管仲曰、老馬之智可レ用也。乃放ニ老馬ニ而隨レ之、遂得レ道。)

管仲・隰朋らが齊の桓公に従って孤竹の国を伐った。往きは春だが帰りは冬で、迷って道が分からなくなった。すると管仲が、老馬の知恵が役に立つのだと言ひ、そこで老馬を放してそのあとについて行くと、道が分かった。在良がこの「管仲隨馬」の故事を引用したのには理由があった。それは、第七句目を合わせて見ていくと、よく分かる。第七句目で在良は、

老陪詩帶何為道

老ひて詩帶に陪し何為れぞ道はん、

と言っている。年寄りの自分がこのような晴れがましい作文会に参列して、一体何を申し上げるのか、と言っている。事实在良は、天永二年のこの時、七十一歳になっている。つまり、「老」は、年老いた在良のことであり、自分のことを「老馬」に例えて言っていることになる。年老いた我が身ではあるが、あの管仲の老馬のように、わたくしをこそ用いて、お役立ていただきたい、という気持ちを表わしているのだ。

### 四

次に第六句目の典故について検討する。第六句目は、

王船添戸造門程

王船の戸に添はんとして門に造る程のことし。

である。これは、『世説新語』を典故とする、王子猷の有名な故事に拠っている。

〈『世説新語』任誕第二十三(注四)〉

王子猷、山陰ニ居リシトキ、夜大イニ雪フル。眠覚メテ、室ヲ開キ、命ジテ酒ヲ酌マシムルニ、四望皎然タリ。因テ起チテ仿

俛シ、左思ノ招隱詩ヲ詠ジ、忽チ戴安道ヲ憶フ。時ニ戴ハ剡ニ在リ。即便チ夜小船ニ乘リテ之ニ就キ、経宿シテ方テ至ル。門ニ造リテ前マズシテ返ル。人、其ノ故ヲ問フニ、王曰ク、吾本興ニ乘ジテ行キ、興尽キテ返ル、何ゾ必ズシモ戴ヲ見ンヤト。

(王子猷居ニ山陰、夜大雪。眠覺、開レ室、命酌レ酒、四望皎然。因起仿俛、詠「左思招隱詩」、忽憶「戴安道」。時戴在剡。即便夜乘「小船」就レ之、経宿方至。造レ門不レ前而返。人問「其故」一、王曰、吾本乘レ興而行、興尽而返、何必見レ戴。)

王子猷(王徽之)が山陰に居たとき、夜大雪が降った。眠りから目覚めて部屋の戸をあけ、酒を斟ませたが、あたりは一面の銀世界である。そこで立ち上がってあたりをさまよひながら左思の「招隱詩」を詠じていたが、ふと戴安道(戴逵)のことを思い出した。當時、戴安道は剡にいたので、さっそく夜小船に乗って彼のもとへ出かけ、一晩かかかってやっと到着した。門まで来ると内に入らずに引き返した。ある人がそのわけをたずねると王はいった。「私はもと興に乗って出かけ、興が尽きるとともに帰ってきたのだ。なにも戴に会わねばならぬこともあるまい。」

さて、この王子猷の故事は、『晋書』、『蒙求』にも見ることができ。話の内容は全く同じだが、小さな違いがあるので、以下に挙げて比較してみる(ただし、訓読は付さない)。

〔晋書〕卷八十、列伝第五十、王羲之(注五)

嘗居ニ山陰、夜雪初霽、月色清明、四望皓然、独酌レ酒詠「左

思招隱詩」、忽憶「戴逵」。達時在剡、便夜乘「小船」詣之、経宿方至、造レ門不レ前而反。人問「其故」、徽之曰、「本乘レ興而行、興尽而反、何必見「安道」邪。」

〔蒙求〕子猷尋戴、(宮内庁書寮部蔵上巻影鈔本) (注六)

世説王子猷居山陰而隱、夜大雪、眠覺開屋酌酒、四望皎然、因起仿俛詠左思招隱詩、忽憶戴安道、時戴在剡縣、使乘「小船」、経宿方至、造門不前返、人問其故也、王曰、乘興而返必見戴也、

〔蒙求〕子猷尋戴(箋注本) (注七)

嘗居ニ山陰、夜雪初霽、月色清明、四望皓然。独酌レ酒詠「左思招隱詩」、忽憶「戴逵」。時達在剡。便夜乘「小船」詣レ之、経レ宿方至。造レ門不レ前而反。人問「其故」。曰、本乘レ興而行、興尽而反。何必見「安道」邪。

『世説新語』では、傍線部分が、「夜大イニ雪フル。四望皎然タリ。(夜大雪。四望皎然)」となつてゐる。ここでは、夜に雪が降つてゐる情景が記されてゐる。しかし、『晋書』では、状況が異なる。「夜雪初メテ霽レ、月色清明、四望皓然タリ。(夜雪初霽、月色清明、四望皓然)」となつており、降り続いてゐた雪が夜になつて止み、月が美しく輝き、辺りは一面の銀世界であるという情景である。また、『蒙求』(宮内庁書寮部蔵上巻影鈔本)では、『世説新語』を引いて、「夜大雪、四望皎然」となつており、やはり夜に雪が降り続いて、辺りは一面の雪景色である様子が描かれてゐる。因みに後世のものではあるが、『蒙求』(箋注本)では、「夜雪初霽、月色清明、

四望皓然。」となっている。

在良の詩では、第三句目に、「月前に眼を送れば華梅は尽き（月  
[圖]送レ眼華梅尽）」とあるので、もう雪は止んで、月が出てい  
ることになっている。在良が、『世説新語』を出典とする王子猷の故事を、  
何のテキストに拠つてこの詩に記したのか、今ここではつきりと限  
定することはできない。

## 五

ここまで見てくると、詩の第一句目「寒雪に対し来れば思幾はく  
ぞ（寒雪対来思幾阿）」の、「思」が何であるのか、分かつてくる。  
在良は、王子猷が雪景色を見て、友人戴逵のことを思い出した、そ  
のことを言っているのではないか。王子猷が友人戴逵のことを思い  
出したように、在良は月の照る一面の銀世界を前にして、ある友人  
のことをじつと思いつめていたのである。その友人とは、つい先頃  
亡くなった、大江匡房のことではないか。そう考えると、この  
在良の詩の言おうとしていることもよく理解でき、趣き深いものと  
なる。

そもそも、大江匡房といえは、当代切つての偉大な人物である。  
匡房と撰閑家との繋がりには強固なものであるし、特に師通とは、学  
問の上でも親しいつき合いがあった。また、天永二年十月五日に行  
なわれた東三条殿での作文会では、詩題「松猷遐年寿」を献じてい  
る。この作文会は、十五歳の忠通が、初めて主催する作文会とあつ  
て、盛大なものであった。『殿曆』『中右記』『永昌記』。しかし、  
匡房は健康上の理由から、詩題を献上するにとどまり、当日の作文

会には列席しなかった。健康上の問題がなければ、題者である匡房  
も出席して、詩を作っていたに違いない。となると、翌月に開かれ  
た本文会でも、題者あるいは序者等を務めたのではないだろうか。  
つまり、本来ならばこの作文会に同席していたであろう匡房のこ  
とを、在良は思いつめていたのである。

もともと、菅原氏と大江氏とは、その先祖が同じ土師氏である。  
また、大学寮の文章院西曹を菅家が、東曹を江家が管理し、両家が、  
学問の家として並び称されたことは、周知の通りである。そして、  
在良は兄是綱が嘉承二（一一〇七）年に亡くなって以降、菅原氏の  
氏長者となつており、大江氏の嫡流である匡房とは、共にそれぞれ  
の氏を代表する間柄である。互いに旧知の仲であり、良きライバル、  
良き理解者であつたことは、想像に難くない。その匡房のことを在  
良が意識しないはずがない。記録として明確に残っているのはわず  
かだが、在良と匡房は、作文会でも、しばしば顔を合わせているは  
ずである。例えば、寛治元年十一月二日に、師通の書閣において開  
かれた作文会である。『尊卑分脉』の記載に従つて考えると、寛治  
元年当時、二人は同年齢の四十七歳であつた。この年、在良は式部  
少輔兼大内記、匡房は左大弁であつた。他に寛治四年四月二十日に、  
堀河天皇が鳥羽殿に行幸した際に催された作文会がある。この時の  
詩題は、匡房の献上した「松樹臨池水」であつた。在良は式部少輔  
兼大内記阿波介となつており、匡房は左大弁兼民部大輔勘解由長官  
越前守となつていた。官職昇進に差こそあれ、共に出席した作文会  
では、互いの腕を競い合つたのであろう。それが、天永二年十月五  
日の忠通主催の東三条殿での作文会では、匡房は題者でありながら、

体調不良のため、詩題のみを献じ、翌月十一月五日には亡くなつてしまつた。偉大な人物を失ない、周囲には動揺が走つたに違いない。また、匡房が亡くなつた十一月五日以降、十一月二十三日の本作文会までの間に、他に作文会が行なわれたという記録を、筆者は現在までのところ見出してはいない。つまり、本作文会は、匡房の死後、はじめて開かれた作文会であり、当日列席した人々にとつては、匡房の死は記憶に新しいことである。そこで在良の詩に接し、人々は匡房喪失の感をいよいよ深くしたのであるまいだろうか。

王船添<sub>レ</sub>戸造<sub>レ</sub>門程 王船の戸に添<sub>レ</sub>はんと<sub>レ</sub>して門に造<sub>レ</sub>る程の  
ことし。

この第六句目までを聞けば、在良が第一句目、二句目で言つていた、  
寒雪<sub>レ</sub>対<sub>レ</sub>来<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>幾<sub>レ</sub>回 寒雪に<sub>レ</sub>対<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>来<sub>レ</sub>れば<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>幾<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>くぞ、

唯<sub>レ</sub>斟<sub>レ</sub>緑<sub>レ</sub>酒<sub>レ</sub>醉<sub>レ</sub>吟<sub>レ</sub>情 唯<sub>レ</sub>だ<sub>レ</sub>緑<sub>レ</sub>酒<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>斟<sub>レ</sub>みて<sub>レ</sub>醉<sub>レ</sub>吟<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>情<sub>レ</sub>あり。

この「思」が、じつと匡房のことを思いつめているのだということ  
は、同席の人々にも通じていたはずである。

## 六

つまり在良は、この詩の中で二つのことを強く訴えかけている。

ひとつは、第五句目に記されている内容である。『韓非子』を典拠とする「管仲隨馬」の故事を引いて、「年老いてはおりませんが、匡房亡き今、どうか私をお役立て下さい」という気持ちを表わしている。また、もうひとつは、第六句目に記されている内容である。『世説新語』を典拠とする「王子猷」の故事を引き、「このような美しい月夜の雪景色を目にすると、かの王子猷がかつて一面の銀世界を

見て興が起こり、ぜひ友人と楽しみたいと、戴逵のことを思い出し、尋ねて行つたのと同じ気持ちで起こつてくる」ことを表わしている。そのように在良が、じつと思いを寄せているのは、作文会の少し前に亡くなつた大江匡房なのである。このように美しい月夜の雪景色を眺めているのだから、そして、忠通主催の作文会に皆が集まつているのだから、ここに大江匡房がいて、共に興趣を分かち合いたいものを、しかし彼はもういないのだと、匡房の死を悼む気持ちを表わしている。

本作文会の後、在良は七十五歳で鳥羽天皇の侍読となるなど、晩年に華やかな活躍を見せる。それには、この年（天永二年）に大江匡房が亡くなつたこと、また、在良が藤原忠実の家司であつたことを通じて、若き忠通とも繋がりを持つていたことなどが、密接に関わっている。ただ、折しも天永二年十一月二十三日忠通邸作文会で在良がこの詩を残していることは、在良の生涯を通して見ていく際に、重要な分岐点となるだろう。

注

参考文献

(注一) 宮内庁書陵部や天理図書館などに分蔵される、平安時代末から鎌倉時代初期の書写と目される九条家旧蔵『中右記部類』紙背にあり、裏書・『公卿補任』及びその他の古文書と共に、紙背文書の一部として現存するものである。『中右記部類紙背漢詩集』という書名は、仮に付したものである。また、『中右記部類』の料紙において、紙表の部類記本文と紙背の筆跡では、裏書を除き、明らかに紙背が古いことが確認されている。宮内庁書陵部『図書寮叢刊』(平安鎌倉未刊詩集) 昭和四十七年三月 解題・書誌参照。

池田利夫『日中比較文学の基礎研究 翻訳説話とその典拠』笠間書院 昭和四十九年一月

(注二) 拙稿「頭を絡む」菅原在良「冬日遊「長楽寺」」について

i (『新樹』第十二輯 平成九年十月十五日) 参照。

(注三) 竹内照夫『韓非子』新釈漢文大系11 明治書院 昭和四十一年三月

(注四) 目加田誠『世説新語』下 新釈漢文大系78 明治書院 昭和五十四年五月

(注五) 楊家駱主編 中国學術類編『晋書』 新校本晋書并附編六種3 鼎文書局

(注六) 池田利夫『蒙求古註集成』上 汲古書院 昭和六十三年十一月

(注七) 早川光三郎『蒙求』上 新釈漢文大系58 明治書院 昭和五十二年九月